超次元ライダーディケイド

神崎ナツヤ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

門矢士の元で育てられた少年、『神崎ナツヤ』

彼は仮面ライダーディケイドとなり九つの世界を巡った

彼が九つ目に訪れた『超次元ゲイムネプテューヌ』の世界

彼はこの世界で自分の生きる意味を見つける…

目次

女神とライダーの邂逅 ―― 1
紫と兎戦車 ―― 7
葛藤と笑顔 ―― 14
孤高の物語 ―― 20
雪国とファンガイアの王 ―― 27
歌姫と希望 ―― 36
破壊者の正体【1】 ―― 42
破壊者の正体【2】 ―― 48
ドS女神とトレジャーハンター ―― 55
バッドエンド【1】 ―― 62

女神とライダーの邂逅

ゲイムギョウ界、そこには４つの国家があった。
女神パープルハートが守護する『プラネテューヌ』
女神ブラックハートが守護する『ラステイション』
女神ホワイトハートが守護する『ルウィー』
女神グリーンハートが守護する『リーンボックス』
彼女たち４人は女神の力の源、『シェア』というものをめぐる争いをしていたが、今日この日……彼女らは友好条約を結び、争うことを辞め、互いに助け合って行くことを誓うのだ
しかし、それを良しとしない者も当然いた……
「これを使えば……今に見てろ……女神共め」
怪しげな男がメモリを手に出かける
「……」
それを見つめる者もまた同じく男の後を追う
彼らは目的は違えど、行先は同じであった……そこは……
友好条約が結ばれる会場、『プラネテューヌ』の『プラネタワー』であった

時は少し戻り『プラネテューヌ』の『プラネタワー』、そこに３人の少女と１匹の妖精（？）が、１人の少女を待っていた
「……遅いわね……」
ツインテールが特徴な少女『ノワール』が怒りを抑えつつ呟く
「すみません……朝は起きてたのですが……」
すみません、と謝る小さい彼女は『イストワール』こう見えて『プラネテューヌ』の教祖である
「謝らなくてもいいわよ……」
ブカブカした大きい帽子を被っている少女が『ブラン』
「そろそろ始まるのに、何やってるのかしら……」
「まぁまぁ、時間はまだありますし、そう怒っていてもダメですわよ？」

ノワールをなだめる女性は『ベール』
「そうは言っても…」
ガチャッ!!
その時、扉が勢いよく開く
「ごっめぇーん!危うく寝坊するところだったよ!」
部屋に入ってきた明るく元気いっぱいな少女は『ネプテューヌ』
「もぉ!今日は大事な予定があるって話してたじゃない!」
「でもでもー、時間には間に合ったしギリギリセーフだよね!」
「アウトよ!」
彼女たちはこう見えて各大陸を代表する守護女神なのである。
その彼女たちが何故プラネタワーに集まっているかと言うと、彼女たちにとって大切な式があるのだ。
「ネプテューヌさん、少しは女神としての自覚を…っと、今は急がなくては行けませんね。話の続きは後ほどにします」
お説教が先延ばしされた。助かったのか助かっていないのかは定かではないが、ひとまず胸を撫で下ろすネプテューヌ
揃ったところで彼女たちは自分らの待機場所に戻る。ネプテューヌも女神化し、ドレスに着替える
「……なんか柄にも無く緊張してきたわ…」
「まぁ緊張していないよりはマシですね」
(これからどうしていくかなんてまだ分からないけど……でも、絶対良くなっていくはずよね)
パープルハートは未来に思いを馳せながら時間が来るのを待つのであった。
ハプニング(ネプテューヌの遅刻)もあったが無事友好条約は始まった
「ちっ、始まりやがったか」
「どうしやす?本来なら友好条約が始まる前にやった方が…」
「作戦変更だ、国民を人質に取りゃ女神は抵抗出来ん」
「えぇ……兄貴それは流石に卑怯じゃないっすか?」
「卑怯もらっきょも大好物だからな、ほら早いとこ行くぞ」

「は、はいさ～」
友好条約が終わりかけの頃に事件は起きた
「……ん？あれは……？」
異変にいち早く気づいたのはプラネテューヌの諜報部員の『アイエフ』であった
「どうしたです？あいちゃん」
隣に座ってるアイエフとネプテューヌの友達、『コンパ』が尋ねる
「いえ…今一瞬人影が……」
「私は見えなかったです～」
「気のせいだといいのだけど……」
しかし気のせいではなかった。
「グゥゥゥルゥゥアアアア!!!!!」
荒い呻き声と共に炎を纏った怪物が現れる
「っ!?な、なんなのあれ！」
「おいおいまずいんじゃねぇのか!?」
「とにかく避難誘導を…」
女神たちが動こうとするが、それよりも早く動く者がいた
ブゥゥゥゥン！
バイクに跨ったまま炎を纏った怪物にぶつかる
「グルァ!?」
そのままバイクは急停止し、ドライバーはヘルメットを外す
「……マグマドーパントか」
特に驚く様子もなく、ただ『敵』を見つめる少年
「ダ、ダレダ貴様…！」
「…？意思疎通が出来るのか……『ヤツ』の手下か？」
「ヤ、ヤツ…？」
「分からないのなら結構だ」
バイクから降りる
「な、なぁ…あの怪物もそうだが、その怪物にぶつかった奴も何者だ？」
「さ、さぁ…」

怪物というイレギュラーな事態に謎の人物も出てきたものだから流石に女神たちも困惑している
「キ、貴様ガ誰ダロウト俺タチノ計画ノ邪魔ハサセンゾ！」
「……」
少年は黒いコートを脱ぎ捨て、ベルトの横からカードを取り出す
「変身」
《カメンライド、ダブル！》
《サイクロン！ジョーカー！》
激しい突風と共に少年の姿が緑と黒の戦士『仮面ライダーW』に変わる
「きゃっ！」
「す、姿が変わった!?」
「女神じゃないのに変身が出来るっていうの!?」
目の前で起こっている現状を受け入れられない女神たちは驚くことしか出来ない
緑と黒の戦士、『仮面ライダーW』はマグマドーパントを左手の人差し指で差しながら喋る
「さぁ…お前の罪を数えろ」
「グッ……カッコツケルナァ！」
マグマドーパントが殴り掛かるが
「…」
それを躱しカウンターで殴る
「グボ!?」
「戦い方が素人だな…お前弱いな？」
「ナ、ナンダト！」
懸命に殴るが
「こんなのが攻撃か？目をつぶってても避けれるぞ？」
体制を崩したマグマドーパントを蹴りあげる
「グヘァ!!」
「たとえ怪物になったとしても、その力を使いこなす事が出来なければ意味は無い」

「グゥ……ウウゥ…」
「辛いだろ、今楽にしてやる」
ベルトの横からまたカードを取り出す
《ファイナルアタックライド、ダダダダブル！》
《ジョーカー！マキシマムドライブ！》
マグマドーパントに対して必殺のライダーキックが炸裂する
「グボアァァァァ!!!」
マグマドーパントの姿はただの男の姿となり、メモリが転がる
「あ……うぁ……」
「……」
メモリを踏みつけ、壊す
「あっ……俺のメモリが……」
男は気絶した
「……」
少年も変身を解き、コートを拾い上げバイクに跨る
「あっ、待って！」
「……？」
パープルハートが降りてくる
「…ありがとう、正直今も何が起こったか理解出来てないけれど……貴方がここにいる人たちを助けたことに変わりはないわ…女神としてお礼を……」
「俺に対して礼は要らない」
パープルハートの言葉をさえぎる
「…え？」
「俺は偽善や善で動いていない……ただ任務だから動いた、それだけだ」
「……たとえそうだとしても…命を救ったのは事実よ」
「……」
少年は言い返さないまま去っていった
「あっ……」
その後のパーティでも話は友好条約の時に起きたことで持ちきり

だった
「だから私は勇者説を押すよ！」
「何わけのわかんないこと言ってんのよ…」
「だってそうじゃない？それなら女神じゃないのに変身出来たのにも説明がつくよ？」
「…謎に説得力があるのやめなさいよ……」
「気になるのはその無愛想な子だけじゃないわ」
「そうですわね、あの時の怪物も正体が分かりませんわ」
「んー、でもまぁ助かったから良かったってことで！」
「アンタねぇ…」
ノワールも呆れてあまり突っ込む気にならないようだ
「でも不思議と……また会える気がする」
「……ええ、確かにそうね」
「奇遇ね、私もそう思うわ」
「私もそう思いますわ」
「はっ！もしかして運命の出会いかも！」
「あんな運命の出会いは嫌よ…」
「……」
少年はプラネテューヌの森の奥にある小屋で休んでいる
「……」
少年はパープルハートから言われた言葉を思い返すが
「……」
少年は否定するかのように首を横に振る
「俺はただ任務のために動いただけ……助けようとは思っていない……」
無理やり自分にそう言い聞かせ彼は床に就く
今、女神たちと少年の物語の歯車が回り始めた…

紫と兎戦車

四女神による友好条約から数週間が経過したプラネテューヌ
「ネプテューヌさん……最初の1週間は何も言いませんでしたよ……？友好条約が終わり、気持ちを切り替えるという意味合いでも休んで欲しかったからです……ですがなんで今も尚だらけているのですか！」
イストワールはゲームに熱中してるネプテューヌに対して言う
「いーすん、私思うんだ」
「……何をですか？」
「…働いたら負けだと思ってる」
「働いてください」
ネプテューヌのボケに即ツッコム
「えー、だって私が働かなくても明日は来るんだよ？」
「ネプテューヌさんが働いても明日は来るんですから…」
そろそろイストワールの胃がキリキリと鳴くかもしれない
「あ、お姉ちゃん」
ネプテューヌをお姉ちゃんと呼ぶ少女は『ネプギア』と言い、立派な女神候補生、ネプテューヌの妹である
「ん？どーしたの？」
「飲み物とプリン持ってきたよー」
「わーい！ありがとうネプギア！」
「ね、ネプギアさんもネプテューヌさんを甘やかさないでください！」
「いいのいいの！いっぱい甘やかして」
「よくありませーん！」
「はぁ～ゲーム…プリン…アイス…」
ネプテューヌはあの後イストワールから無理やり討伐クエストを受けさせられたのだ
「…まぁ受けたものは仕方ないよね…よぉし！気合い入れて行こー！」
その時、奥から大きな音が聞こえてくる

「ねぷっ!?何この音！」
　ネプテューヌは好奇心から音のした方向へと進む
「ぬらぁ～！」
「ハッ！」
　少年はただ無心に、されど力強く剣を振る
「ぬらぁ～!!」
「ぬぅらぁー」
　スライムの見た目の『スライヌ』たちが倒されていく
「…トドメだ」
　少年がトドメを刺そうとする所に
「あー！君はあの時のー！」
「っ!?」
　後ろから大声で喋りかけられ少し驚くが、冷静に振り向く
「……お前は…」
「また会ったね！君の名前は？」
「…は？」
　少年からすればこんな女の人は知らない
「ああそっか、私が名乗ってなかったね！私はネプテューヌだよ！」
「あ、ああ……」
　名前を聞きたいんじゃない…そう思う少年
「ほらほら！君の名前教えて！」
「……俺の名前は…」
　一瞬、名乗るのを躊躇う……が、答えなければ不審に思われるだろうと思った少年は名乗ることにする
「俺は『神崎ナツヤ』だ…」
「ふむふむ…よろしくねナッちゃん！」
「な、ナッちゃん…？」
「私の事はネプテューヌでも何でも！好きに呼んで！」
「…ね、ネプテューヌ……ナッちゃんはやめてくれないか…？」
「ナッちゃんは嫌だった？」
「嫌というか…ナッちゃんとは呼ばれたことがないから…」

「じゃあナツヤって呼ぶね！改めてよろしくね！ナツヤ！」
「あ、ああ……よろしくネプテューヌ…」
少年…神崎ナツヤはネプテューヌのようなタイプは苦手である
「ねぇねぇ！あの日のこと覚えてる？というか君であってるよね？」
「な、何が……？」
ナツヤ本人の意思と関係なく会話がどんどん続くからだ
「ほら、友好条約の時の怪物を倒してくれたの」
「……ああ…確かに倒した」
「だよね！じゃあ私のことも……ってそっか、その時私女神化してたんだった……そりゃ分かんないよね！」
見てて、と言うとネプテューヌは光に包まれる
「なっ!?」
光が晴れると、そこにはネプテューヌとは違う人がいた
「これが、女神パープルハートの姿よ」
「その姿はあの時……」
ナツヤはあの時自分に話しかけてきた人物を思い出した
「あの時は本当にありがとう、あなたは任務だなんて言うけど…」
「本当の事だ」
「任務であってもあなたがしたことは…」
ドスーン
「っ！」
「何この音…」
何かデカい音が聞こえてくる
「近いな…」
「ええ」
お互いに音がした方向を警戒する
ドスーーン！ドスーーン！
木々を薙ぎ倒し、現れたのは翼が焼けて飛べなくなってる『エンシェントドラゴン』であった
「なっ……！どうしてこんな奴がここに！」
「奴の住処はこの近くではないのか？」

「いいえ…！こいつがここに住処を作ったなんて情報はなかったはず…」
ふと、パープルハートは今朝の何気なく手に取った資料を思い出した
「……そう言えば…エンシェントドラゴンの縄張り争いが起きて、それに負けた奴がここにいるって情報が…」
「つまり、あれが負けた方か」
「そう見たいね…」
エンシェントドラゴンは焼けた翼の痛みで我を失っている
「まずいわね…このままあいつを行かせたら街が大変なことに……！」
「…それなら、倒すしかないな」
「で、でも…私はともかくあなたは…」
「こんな事もあろうかと鍛錬は怠っていない」
ベルトの横からカードを取り出す
「それに、1人より2人の方が効率がいいだろ」
「……それもそうね…無茶だけはしないで」
「お互いにな」
《カメンライド、ビルド！》
《鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イェーイ！》
「勝利の法則は…決まった」
「…決めゼリフ？」
「……気にするな、来るぞ」
赤と青の戦士『仮面ライダービルド』と紫の守護女神『パープルハート』がエンシェントドラゴンに立ち向かう
「グルォォォ!!」
エンシェントドラゴンは2人に向かって火を吐く
「ふっ！」
「っ！」
パープルハートは飛翔して、ナツヤはラビットの力でジャンプして躱す
「こいつに弱点は？」

「個体差があるけれど大抵は頭よ」
「了解」
　ナツヤは着地すると今度はエンシェントドラゴンの頭部目掛けてジャンプする
「グルォォォ!!」
　それを火を吐いて迎撃しようとするが
「させない!」
　それを横からパープルハートが斬りつけて阻止する
「ナイスアシスト」
　そのまま頭部目掛けてキック
「っ!硬い…」
　だが効いている様子はない
「としたらあそこね」
　首元を指さす
「分かった」
「グルォォォ!!」
「私が惹きつけるわ!」
　パープルハートが飛翔し、エンシェントドラゴンの注意を引く
「そらそらこっちよ!こっちを見なさい!」
「グルォォォ!」
　パープルハートの思惑通り、エンシェントドラゴンの注意が完全にパープルハートの方に行った
「今…よ!」
　顔を斬りつけてその場を離れる
「喰らえ」
《ファイナルアタックライド、ビビビビルド!》
《ボルテック!フィニッシュ!》
　グラフがエンシェントドラゴンを拘束し、そのまま首元を蹴り飛ばす
「グルォォォァァァ!!!」
　断末魔と共にエンシェントドラゴンは消滅した

「……」
「やったわね」
「ああ」
　変身を解くナツヤとネプテューヌ
「それにしても凄くカッコイイね！」
「……何が…」
「全部だよ！決めゼリフといい変身した姿といい必殺技といい！」
「……」
「あ、もう行かなきゃ！」
　空は赤みが増してきた
「また会えるよね？」
「……さぁな…」
「でもまた会える気がする…あ、これ私の直感なんだけどね！私の直感って当たるんだよ！」
「…そうか」
「反応薄いなぁ～、けど悪い人じゃないってことは分かったよ」
「……どういう意味だ」
「だって、戦ってる時も私のこと気にしてたでしょ？」
「それは……」
　ネプテューヌに言われてふと思い返すと、確かに気にしてたかもしれない……
「気のせいだ」
「ほんとぉ？」
「本当だ」
「結構頑固だなぁ…あ、そろそろ行かなきゃほんとにヤバい！じゃあね！」
　ネプテューヌは駆け足でその場を後にする
「……」
　ナツヤは少し疲れた様子で空を見上げる
「…俺は……俺が心配などするわけが……」
　だが戦闘中にネプテューヌがやられないか気にしていたのは本当

だ

「……くっ！」

ナツヤは自分の気持ちが分からぬまま小屋へと帰っていく

葛藤と笑顔

「…私、お姉ちゃんみたいに強くなりたい…」
　そう思う女神候補生『ネプギア』であるが、一向に強くならないことを悩んでいる
「……はぁ」
「どうしたの？ネプギア」
「え、あ、なんでもないよ」
「そう？」
「うん、大丈夫…」
　何やら元気がなさそうなネプギアを心配するネプテューヌ
「うーん……あ、そうだ！ネプギア！今日予定ある？」
「え？何も無いけど…どうしたの？」
「いい所に連れて行ってあげる！」
「い、いい所……？」
「どこへ行く気なんですかネプテューヌさん」
「ギクッ！…い、いーすん…」
「……とまぁ、いつもならお説教に入るのですが……私もネプギアさんの元気がないのは心配なので、女神である前に、姉としてネプギアさんを元気づけてあげてください」
「ありがといーすん！それじゃあ行こ！」
「え、あ、うん」
　訳の分からぬままネプギアはネプテューヌに手を引っ張られる
「全く……仕事はしないのに人を見る目は誰よりもあるんですよね…」
　少し呆れているがそれがネプテューヌだと割り切るイストワール
「お、お姉ちゃん……一体どこに連れていくの…？」
「いい所だよ！」
「いい所って……ここ森の奥だよ？」
「大丈夫大丈夫！ほら！見えてきた！」
　そこにあるのは小さな小屋だった

「……小屋？」
「多分ここで合ってると思うんだけどなぁ～」
　ネプテューヌはノックもせず扉を開ける
「お、お姉ちゃん!?」
「お邪魔しまーす！」
「……何でここが……いやそれよりもノックしろ」
「も～冷たいな～、ナッちゃんと私の中じゃ～ん」
「ナッちゃんはやめろ」
「あ、あの……」
「……この人は」
「紹介するね！私の自慢の妹のネプギアだよ！」
「あ、は、初めまして…えっと…」
「ナッちゃんは神崎ナツヤって言うんだよ！」
「勝手に名前を……まぁいい……よろしくなネプギア」
「あ、はい…」
「…ひとまずここに来た理由は」
「最近ネプギアの元気がないからさ！」
「ここに来ても変わらんと思うが…」
「ほら、ナツヤって強いでしょ？」
「……強いかは知らん…」
「私からすれば強いからさ！ネプギアに稽古をつけてあげてよ！」
「稽古を…？」
「お姉ちゃん!?」
「だって、ネプギアってそれで悩んでたんでしょ？」
「わ、分かってたの…？」
「うん、だって私はネプギアのお姉ちゃんだからね！」
「……」
　素直に凄いと感心するナツヤ
「……あの…ナツヤさん」
「なんだ」
「…わ、私に…私に稽古をつけてください！」

「……俺から教えることは少ない」
「えっ……」
「なぜなら俺は、強さは人に教えてもらうものではないと思ってるからだ」
「……」
「強さは自分の中にある、それは自分自身でしか気づけないものだ」
「自分の…中に……」
「……けれど、そのきっかけくらいは作ってやれる」
「そ、それじゃあ…」
「外に出るぞ、少しだけ稽古をつけてやるよ」
「良かったねネプギア！」
「うん！ありがとうお姉ちゃん！ありがとうございますナツヤさん！」
「礼はいい…」
　こうして短い時間のネプギアの稽古が始まる
「と言っても、俺は教える事が苦手だ」
「え？」
「つまり」
　ベルトの横からカードを取り出す
「実戦形式だ」
《カメンライド、クウガ！》
　赤の鎧を身に纏う戦士『仮面ライダークウガ』に姿を変える
「え、ええ!?」
「大丈夫だよネプギア！」
「そ、そうは言っても…」
「行くぞ」
　ナツヤはネプギアにダッシュで距離を縮める
「っ！」
　すぐさま剣を出して構える
「ハッ！」
　飛び蹴りでネプギアに蹴りかかる

「っ！」
後ろに飛び退きそれを回避
「…」
すぐさま距離を縮めて攻撃に入る
「くっ！はぁ！」
ネプギアも距離を縮めて剣で斬り掛かる
「下ががら空きだ！」
ローキックでネプギアを転ばせる
「なっ！きゃ！」
それをすんでのところで受け止める
「あ…」
「ただ闇雲に攻撃に転じるだけじゃ隙を作る、相手が隙をつくのを予測するんだ」
「は、はい！」
「よし、次だ」
《フォームライド、ドラゴン！》
今度は赤ではなく青の鎧に変わる、武器も拳から槍に変わる
「この場合相手の武器がリーチが長い、どうする？」
「…武器を弾く…？」
「それも有効だが……リーチが長いとそれを戻すのに時間がかかる場合がある、そこをつく」
「な、なるほど」
２人の稽古を見つめるネプテューヌ
「何だかんだナッちゃん教えるの上手いじゃん…ネプギアも元気そう…連れてきて良かった」
安堵の表情で見つめる
実はネプテューヌは少しだけ不安だったのだ、自分のせいでネプギアは元気がないのではないかと思っていたのだ
「でも杞憂みたいで良かった」
槍を使う『ドラゴンフォーム』
弓を使う『ペガサスフォーム』

剣を使う『タイタンフォーム』
この3種類と戦う内に、ネプギアも戦うコツが分かってきたようだ
遠距離で戦う相手に対しては物陰等で防ぎ、自分よりもパワーがある相手に対しては受け流して反撃することを学んだ
「ナツヤさんとここまで戦ってきて、何かコツを掴んだ気がします！」
「そうか、それじゃあ最後に一つだけある」
「はい！」
「…今俺が教えたのはあくまでも単純な強さだ、これを生かすためにはネプギア自身の強さも必要だ」
「私なりの強さ…」
「ああ」
「……すみません、今はまだ分かりません……」
「……」
「だから、これからナツヤさんがいう私なりの強さを見つけるため、頑張ります！」
「ああ…頑張れ」
（今のネプギアの弱さを教えればネプギアの強さを見つけることは出来るだろう……だが、それでは意味が無い…ネプギア自身が、気づかなければならない…）
（今のナッちゃんの気持ち、分かるよ…ネプギアは私を頼るあまり弱い自分のままでいいって心の奥底で思ってる…強くならなきゃという思いも、ただ私と肩を並べたいだけ……真の意味で強くなるっていうのは……私を超える勢いじゃなきゃ）
（頑張ろう私…！お姉ちゃんと肩を並べるために…！）
「それにしても、教え方上手かったよナッちゃん！」
「ナッちゃんはやめろ…」
「確かにナツヤさん、教えるの上手かったですよ」
「そうか……？」
「あ、そろそろ帰ろうよお姉ちゃん」
「確かに、それじゃあまたねナツヤ！」
「……ああ」

「今日はありがとうございました、また会いましょうね」
「…ああ」
「…なんなんだ…この気持ちは……安らぐ……？」
ナツヤは自分の感じている気持ちが分からなかった
「……ふん、安らぎなど……感じるわけが無い…」
自分の気持ちを振り払い床に就く

孤高の物語

現在、ネプテューヌとネプギアはブラックハートが守護する国家、『ラステイション』に来ている、なぜここに来たかは数時間前に遡る
「ネプテューヌさん…友好条約から1ヶ月過ぎました……なのに……どうしてまだ遊んでばかりなんですか！」
「ほら、働いたら」
「働いたら負けかなじゃないんです!!」
「ねぷ!?」
今日のイストワールはいつにも増して怒っていた、それもそうだろう、何かと理由をつけて仕事をしないネプテューヌを1ヶ月も見過ごしていたのだからだ
「ネプテューヌさぁぁん」
「ええっと……あ、そうだ！」
ネプテューヌは何かを思いついたのか、立ち上がる
「私、ノワールの所に行って女神の心得を聞きに行くよ！」
「……はぁ？」
イストワールはあまり呑み込めていないようだ
「行ってくるね！」
ネプテューヌはネプギアの手を掴み、ラステイションに向かう
「え？あ、ちょ、お姉ちゃん!?」
「……あ、ネプテューヌさん!?」
そして、今に至る
「だからといって…どうして私のところに来るのよ」
「えー、だってノワールが寂しそうだからさ」
「ちょ、寂しそうってどういうことよ!?」
「そのままの意味だよぉ！ほら、ノワールって友達いないでしょ？」
「いるわよ！私にだって友達の1人や2人…」
ノワールとネプテューヌが言い争っているところに、ノワールの妹である『ユニ』が来た
「お、お姉ちゃん、言われてた書類終わったよ」

「ああそう、書類は机の上に置いておいて」
「……あ、あの…お姉ちゃん」
「ん？なに？」
「あっ……な、なんでもない」
「そう」
　ユニは部屋を後にする
「あ、ユニちゃん」
　ネプギアも後を追う
「……あ！まさかユニちゃんを友達として！」
「違うわよ！」
「……はぁ」
　ユニは暗い顔をしている
「あ、ユニちゃん！」
「ネプギア…」
「大丈夫？」
「……うん」
　ネプギアもユニの隣に座る
「…私…お姉ちゃんにどう思われてるのかな…」
「え？」
「……」
「あ……えっと……」
　ネプギアは少し言葉につまる
「私たち女神候補生はまだ女神化出来ないから…お姉ちゃんたちの力にもなれない……」
「っ……」
　ネプギアはナツヤに言われた言葉を思い出す
「……ユニちゃん…その……力っていうのは、自分の中にあるもので、それは自分自身でしか気づけないものなんだよ」
「ネプギア…」
「だから、ユニちゃんはユニちゃんなりの…」
「何かいい事あったの？」

「……へ？」
「顔が赤いわよ？」
「あ……」
　小川で反射する自分の顔を見ると…確かに赤い
「あ……ぅ……」
「やっぱりいい事あったんだ」
「そそそそそ、そんなことないよ!!」
　あまりにも苦しい言い訳だ
「ふぅ～ん？まぁおめでとうって言っておくわね」
「なんで!?」
　そんなやり取りをすること数分後
「なんで私たちここにいるんだっけ」
「女神の心得を聞きに来たからこそ、あなた達の株をあげるところから始めるのよ」
　ネプテューヌの疑問に答える、国民に尊厳を見せるためだけに変身したブラックハートが答える
「それで私達も呼んだわけですね」
　その横にいるのはアイエフ、その横にはコンパ
「それじゃあ行くよー！」
　太刀を呼び出しスライヌの軍団に突撃するネプテューヌ
「あ、待ってよお姉ちゃん！」
　それについて行くネプギアたち
「……ねぇお姉ちゃん…みんな苦戦してない…？」
「数が多いからね」
「……」
「ダメよ、ラステイションの貴方が行ったらネプテューヌたちの株は上がらないわ」
「っ……そう、だよね…」
「ああ女神様、あの洞窟から何やら奇妙な声が…」
「奇妙な声……分かったわ、ユニ、ここは任せたわよ」
「う、うん」

そして声がする洞窟に向かうブラックハート
「……」
そして後を追うナツヤ
「ここから奇妙な声が……っ！」
「グルオオオオオオ」
そこには傷ついたエンシェントドラゴンがいた
「なるほど…ここはエンシェントドラゴンの住処なわけね、しかも後から来た…」
「グルオオオオオオアアア！」
「くっ！」
それを躱す
「全く……痛い目見なきゃ分からないよう……っ!?」
突如としてブラックハートの力が抜け、女神化を維持できなくなる
「な、なんで……体に力が……」
「グルオオオ」
「っ……」
ノワールは悟った…ああ、私はここで終わりなんだと
「……」
「諦めるのは少しばかり早いんじゃないか？」
誰かがノワールの前に立つ
「なっ！あなた一体……っ！」
ノワールが見たのは黒コートに身を包んだ少年だった
「あなた……まさか神崎ナツヤ…？」
「ネプテューヌから名前を？」
「え、ええ……なんの用よ…こんな敵私1人で…」
「諦めてたのにか？」
「っ……」
図星をつかれて言葉が出ないノワール
「それにな、他人を頼るのは弱さでは無い」
「…」
「他人を頼らないと、いつか倒れるぞ」

「あなたに言われなくても……」
「ナッちゃんの言う通りだよ！」
　ネプテューヌが駆けつける
「ね、ネプテューヌ…」
「…ナッちゃん言うな」
「私は……」
「私たち、友達だよ」
「っ…」
「もちろんナッちゃんも！」
「……ああ」
　ベルトの横からカードを取り出す
《カメンライド、セイバー》
《ブレイブドラゴーン！烈火、一冊！・・・勇気の竜と火炎剣烈火が交わる時、真紅の剣が悪を貫く！》
　ドラゴンと炎が交わる戦士『仮面ライダーセイバー』に変身した
「物語の結末は、俺が決める」
「行くわよ、ナッちゃん」
「……もうそれでいいよ」
　パープルハートの根気（？）に押されたナツヤはナッちゃん呼びを諦める
「ネプテューヌは右から、俺は左から行く」
「了解よ！」
　パープルハートは飛翔して右から攻める
　ナツヤはノワールを気にしながら左から攻める
「ハァァ！」
　パープルハートは上から斬りつける
「グルォォォォォ！」
「ハァ！」
　ナツヤはエンシェントドラゴンの足を重点的に斬りつける
「グルォォォ!!」
「やはり手負いか…これなら」

「2人で決めるわよ！」
「…ああ」
《ファイナルアタックライド、セセセセイバー！》
《必殺読破！　ドラゴン一冊撃！　ファイヤー！　》
　ナツヤの周囲を炎が包み、足に炎を纏わせて飛ぶ
「クロスコンビネーション！」
　パープルハートがエンシェントドラゴンの背中を斬りつけ
「ハァァ！」
　そのままナツヤが蹴り飛ばす
「グルォォォァァァ!!」
「……」
　グララララララララ
「な、なに!?」
「さっきの衝撃で洞窟が崩れるな」
「崩れるの!?」
「脱出するぞ」
　ノワールを抱き抱える
「ちょ!?」
「私もして欲しいのだけど？」
「お前は飛べよ」
「冷たいわねナッちゃん」
　何とか脱出成功した3人
「何とか脱出出来たね」
「ああ」
「……は、早く降ろして…」
「ああ悪い」
　そっと降ろす
「あれ？ノワール顔赤いよ？」
「う、うっさい！」
「お姉ちゃーん！」
　ネプギアたちが迎えに来た

「そろそろ行くよ」
「えー？もう行っちゃうの？」
「ああ、本来の任務も達成されたからな」
　ナツヤは去ろうとするが
「…ねぇ」
「……なんだ」
「…あなたの任務っていうのは何？任務じゃないのに私を助けたのはなんで？」
「……答えれないな」
「…そう…でもいつか答えてくれるのよね？分かるわ」
「……」
　ナツヤは答えずその場を去る
「……なんで助けたか……俺が知りたいな」
　彼はまだ、自分の気持ちに素直になれない……

雪国とファンガイアの王

ネプテューヌらは現在、雪国のルウィーに来ている
「わー！凄い雪！きれーい！」
ネプテューヌは案の定はしゃぐ
「全く…はしゃぐんじゃないわよ…」
彼女たちはルウィーのブランの元を尋ねるため列車等で移動している
時は遡る
「……はぁ」
ルウィーの守護女神『ブラン』はため息をつく、その原因の1つとして今日に新たな執事が来るのだ
執事が来るというのはもちろん喜ばしいのだが、ブランの妹である『ロム』と『ラム』はイタズラ好きの双子なのだ、そのせいでよく執事は辞めていく
「今回は……せめて1週間持ってくれれば……」
コンコン
「ブラン様、執事さんが来ましたよ」
「ありがと…入ってもらって」
ガチャ
扉が開くと、そこにはブランより背が高い少年がいた
「本日はお時間を頂きありがとうございます」
軽く頭を下げる
「いいえ、執事を名乗り出てくれてありがとう…あなたの名前は？」
「自分は神崎ナツヤと言います、よろしくお願いします」
「私はルウィーの守護女神ブラン…よろしくお願いするわ」
2人がお互い名乗るとナツヤの後ろから足音が聞こえる
「わ！その人誰？」
「誰？（そわそわ）」
「新しい執事の神崎ナツヤです」
ナツヤは2人の視線に合わせて屈む

「へー！じゃあ遊んで！」
「遊ぼ！（わくわく）」
「いいですね、何で遊びます？」
「鬼ごっこ！執事さんが鬼！」
「いいですよ、じゃあ数えますね」
「わーい！行こ！ロムちゃん！」
「うん！（わくわく）」
２人は逃げる
「……元気があって良い双子ですね」
「…２人はイタズラ好きで……」
「みなまで言わなくても分かりますよ、２人のイタズラで辞めていく執事が多いんでしょ？」
「そ、それを知ってて……？」
「ええ、ブラン様の身が心配で」
「っ…」
自分の身を気遣われた事があまりなかったので不意をつかれたブラン
「さて、そろそろ行きますか」
ナツヤは２人の後を追う
「……雇って正解ね…」
ブランはそう言うと作業に戻る
そして時は戻り
ネプテューヌたちが来る前、ベールも来ていた
「どうぞ」
ナツヤはベールに対して紅茶を出す
「…良いお味ですね…私にも迎えたいですわ」
「ダメよ、ナツヤはうちの執事よ」
「あらあら、冗談ですわ」
パタパタパタ
「お姉ちゃーん！」
「どうしたの？」

「コレ見て！」
　そこには一冊の本があった
「なっ……！」
　落書きがしてあった…落書きまでは良いのだ、落書きなどいつもしているから……だが、その本はブランが大切にしている本なのだ
「……テメェらァ!!」
「わーい！落書きと同じ顔になったー！逃げろー！」
「逃げろー！（パタパタ）」
「こっらぁ！待てー！」
「……行っちゃいましたね…」
「……ナツヤさん」
「はい？」
「…ブランはああ見えて自分で全て背負い込んでいるんですわ」
「…」
「ブランのこと、よろしくお願いしますわね」
「……ええ」
「ナツヤ、今すぐ４人分…いえ、６人分の紅茶作ってくれる？」
「来客ですか？」
「ええ、急がなくてもいいわ」
「了解です」
　ナツヤは台所に行く
「ネプテューヌさんたちですか？」
「ええ…」
「恐らくネプテューヌたちかな…」
　そんなことを思いながら用意する
「というかそれなら８人分……ああ、ベールさんは飲んでるし…ブランは要らないからかな」
　そう言いながら紅茶を載せたトレイを持っていく
　バン！
「うるせぇな！私は行けないって言ってんだろ！」
　ブランの大声が聞こえる

「…ブラン……？」
「……」
恐らく楽しいお茶会だった空気が沈む
「…行くなら私以外で行ってちょうだい……！」
ブランは協会の中に戻る、その時ナツヤとすれ違う
「…」
「……ごめんなさい…みっともないわね」
「…いえ、感情を持ってる限り怒りもある」
「……慰めとして受け取るわ…」
ブランはすぐさま自分の部屋に入っていった
外を見るとネプテューヌたちが出かけたあとだった
「……紅茶勿体ないな…」
どれくらいの時間が経っただろうか、ナツヤは呼ばれても対応できるよう外で鍛錬を積んでいると、ネプテューヌたちが急いで戻ってきた
「ん？」
よく見たらロムとラムがいない
「……」
ナツヤは後をつける
「ブラン！開けて！ブラン！」
「帰って……！あなた達は悪くない…」
「お願いです！話を聞いてください！」
「帰って！」
「……」
ナツヤは全てを察した…
「俺がついていけば…くっ！」
ナツヤはブランの部屋に入るため窓側に回る
窓から見ると、ブランの部屋には謎の子供がいた
「なんだ…？」
「聞きましたか！やはり幼女には国を収めるのは無理なんです！」
……は？

「っざけんなよ…」
　ナツヤは窓をわりブランの部屋の中に入る
「な、なによ！」
「な……ナツヤ……」
　ブランは酷く怯えてる
「……お前に……ブランの辛さがわかるのか！」
　カメラを叩き割る
「なぁ!?」
「お前にはブランの辛さが！悲しみが！頑張りが分かるのかよ！」
「ひっ……き、きききき今日の所は撤退よ！」
　子供は撤退
「……ブラン…」
「ナ……ツヤ…」
「……ロムとラムがさらわれたようだ」
「……」
「大丈夫、俺が連れ戻す」
「…え…？」
「必ず……連れ戻す」
「……ありがとう…」
「グへへへへへへ、幼女たーん」
　ロムとラムを攫った犯人は『トリック・ザ・ハード』という者で、ロリコンだ
「はぁ……トリック様はロリコンだからなぁ……」
「ロリコンでは無い！私は幼女たんを愛するだけだ！」
「……（それをロリコンって言うんじゃ…）」
　下っ端はそんなことを思いながら入口の見回りに行く
「ぐへ！ぐへへ！」
「あっち行け！ロムちゃんに触らないで！」
「ラムちゃん…（うるうる）」
「うぉぉ！幼女たんの反抗期！だがそれも！いい！」
　その時だった

ドォン！
天井が抜け落ち、1人の男が落ちてくる
「なっ!?誰だ!?」
「……」
怒りを露にしたナツヤがいた
「な、ナツヤお兄ちゃん！」
「お兄ちゃん…（うるうる）」
「お兄ちゃん呼びだどぉ!?貴様何者！」
「……れよ」
「な、なに？」
「黙れよロリコン野郎！」
「っ!?」
「ひっ!?」
「お兄ちゃん怖い（がくがく）」
「そ、それ以上近づくな！」
「…その汚い手を離せよロリコン野郎！」
《カメンライド、キバ！》
そこにはヴァンパイアの王『仮面ライダーキバ』が君臨していた
「な、なんだお前…はっ！まさか貴様がマジェコンヌ様の言っていた!?」
「……」
無言のままトリックを殴り飛ばす
「ぐは!?」
「殴り倒しても……気が済まない…！」
「ぐぅ！こ、こうなれば！」
「ダァ！」
殴り飛ばした時に、トリックは自慢の舌でロムとラムを掴む
「しまった！クソっ！」
ナツヤは後を追う
「いてて……まさかあいつがマジェコンヌ様の危険人物だとはな…ん？幼女たんがいない！」

ロムとラムは逃げようとしてる
「は、早くロムちゃん！」
「ううっ…（うるうる）」
「おお！そんなところに！幼女たーんげほ!?」
横から誰かの攻撃が来た
そこに立っていたのは、ブランだった
「私の可愛い妹に手を出してんじゃねぇよロリコン野郎」
「ぐふふ、男に罵られる趣味はないが、幼女たんに罵られるのはご褒美！」
「それなら褒め殺しにしてやるぜ…」
ブランはホワイトハートに変身し、トリックに攻撃しようとするが
「ダァ！」
トリックを横からナツヤが殴る
「だっ！テメェ……ナツヤか？」
「ブラン…体はいいのか」
「へっ、気づいてたか……けど、妹助けれない姉が居てたまるかよ」
「あまり無理はするなよ」
《フォームライド、エンペラー》
ヴァンパイアの王はその身を黄金の鎧で包み込む
「綺麗だな」
「そうか、行くぞ！」
黄金の鎧で包まれる『仮面ライダーキバエンペラー』と白の守護女神『ホワイトハート』がロリコン野郎と対峙する
「ぐぬぅ！幼女たんに愛されすぎだろ！」
「愛されてる自覚はない…！」
ザンバットソードで斬りつける
「ハァ！」
ホワイトハートも自慢の斧で叩きつける
「いだぁぁい！」
「ブラン、そろそろ方をつけるぞ」
「ああ！」

《ファイナルアタックライド、キキキキバエンペラー！》
《ダークネスフィーバー！》
「だァァァ！」
　自慢の斧でトリックをかち上げ、そこをナツヤが蹴り飛ばす！
「ぐはぁぁぁぁぁ!!幼女たんに栄光あれー！」
　キラーン★
「お姉ちゃん…お姉ちゃん！」
「ロム！ラム！」
「うわぁぁん！怖かったよォー！」
「お姉ちゃん、コレ見て」
　ロムとラムのポッケからポシェモンのメダルが出てくる
「これって…」
「お兄ちゃんとも、お揃い…」
「ロム…」
　ナツヤも近づく
「ありがとな…」
「ホントに辞めるの…？」
「ああ、一時的に任務のために居ただけだからか」
「……でも、あの時私やロム、ラムのために怒った姿…あれが本当のあなたなのよね」
「……そうなのかもな、自分でも分からない」
「そう…いつでも来ていいからね」
「ああ」
　ナツヤが去ろうとすると
「ナツヤお兄ちゃん！」
「ん？」
「これあげる！」
　ロムとラムの手には、ブラン、ロム、ラム、ナツヤが笑顔で手を繋いでる絵があった
「あげる！大切にしてね！」
「私たちの思い出（わくわく）」

「……ああ、ありがとう…大切にするよ」
小屋に戻ったナツヤはロムとラムから貰った絵を大切に持っている
「…いつもならこんなもの貰わないのにな……」
飾ろうとするが、ナツヤの部屋はベッドとパソコン、机しかない
「……」
いつもの部屋のはずなのに…何故か質素に感じた
「……棚を買わなきゃな…」
彼の感情にも変化が訪れてきたのだ……

歌姫と希望

神崎ナツヤは今、『グリーンハート』が治める『リーンボックス』に来ている

「……」

彼のここでの任務は、リーンボックスの歌姫『5．b．p』のライブを成功させることだ、そのため5．b．pのマネージャー代理を担当している

（マネージャー代理になったはいいものの…どうするか）

ナツヤが困っているのも無理ない、現在彼女宛に脅迫状が届いているのだ

「……5．b．pのライブを中止しなければ観客を皆殺し……」

よくある脅迫状と言えば気が楽になるのだが、これは以前から届いてるとの事、気にしない訳にもいかないだろう

「どうします？今なら中止に出来ますけど」

「馬鹿言え！高い金払ったのに中止にできるか！そんなことしたらグリーンハート様たちになんと言えばいいか！」

重役達が話し合っている所を聞いているナツヤ

（確かに、お金の問題を抜きにしても……脅迫状に屈したら思うつぼだろう……だがもしこれが脅しではなければ…）

「とにかくライブは行う！これは決定事項だ！」

「は、はい！」

どうやらライブは行う方向に持っていったようだ

「ああいたのかねマネージャー代理」

「はい」

「5．b．pの出番があと少しであるから、彼女の調子を見てきたまえ」

「…はい」

ナツヤは5．b．pの楽屋へと向かう

コンコン

「……俺だ、入るぞ」

部屋の中は暗く、5．b．p本人は部屋の隅で蹲っている
「……どうした、調子が悪いのか？」
「…ライブ……やることになったんですか…？」
「……ああ」
「っ……ぼ、僕…ライブを辞退したいです…」
彼女の思いとしたら妥当だろう、彼女は自分がライブを出来ないことよりも自分のライブを見に来てくれた人々が傷つくのが嫌なのだ
「仕方ないだろう、決まったことだ」
「嫌なんです……僕のせいで誰かが傷つくの…」
「誰も傷つかない」
「なっ…どうしてそんなこと…」
「俺がみんなを守る」
「マネージャー…が？」
「ああ、それにな…皆がお前の歌を聴きにくるのは、みんなにとってお前の歌声が希望だからじゃないのか？」
「僕の歌声が……希望？」
「人は心のどこかに闇がある、それは自分自身でも認識出来ないかもしれない……けれど、お前の歌を聴くと心が安らぐ人もいる、その人にとってはお前の歌声は希望なんだ」
「僕が皆の……希望……」
「観客は俺が守る、だからお前は歌え」
「マネージャー……」
「そろそろ時間だ、行こう」
「あ、マネージャー！」
「なんだ」
「あ…その……ありがとうございます」
「……俺は事実を言ったまでだ、礼はいい」
そして彼女のライブが行われることになる
「クソっ！中止にしないじゃないか！」
「そう焦るな、まだ手はある」
謎の人物は男に向かって手を向けると、男は苦しみ悶え、怪人に姿

を変える
「お前自身を捨て駒にすれば問題は無いだろ？」
「ヴヴヴゥ」
怪人は5．b．pのライブを潰すため、5．b．pの元へ向かっていった
「……」
5．b．pは緊張と不安に押しつぶされそうだった、自分のライブを見に来た人が傷つくのでは無いか、そんな状態で自分は歌えるのかと思っていた
けれど、それはナツヤが否定してくれた、5．b．pは緊張と不安を振り払って笑顔を見せる
「僕……頑張る」
それは自分に言い聞かせる言葉だった
幕は上がり、たくさんの拍手の中5．b．pのライブが始まろうとしていた
「皆！僕のライブに来てくれてありがとう！今日も精一杯歌うね！」
盛り上がる観客たち
「グゥゥゥ…」
しかし怪物が現れると観客たちは困惑する、ライブの演出だと思う者、何かしら関係者の人だと思う者、大勢の感情は1つの銃声に遮られる
「グルゥァ!?」
「やはり現れたか」
下座の方からナツヤが姿を現す
「マネージャー！」
「こいつは俺に任せろ、お前は歌え」
「え…あ…」
怪物を目の当たりにしてか、5．b．pは震えている
「ねぇあれってナツちゃんじゃない？」
「まぁ、あのお方が」
「何とか助けに……」

「いえ、もしかしたら怪物の仲間がいるかもしれない…迂闊に動けないわね…」
観客席にいるネプテューヌたちも、怪物の仲間の存在があるかもしれないと動けずにいる
「皆の希望なら、前を向け」
「でも……でも…」
恐怖で震えている5．b．pに対して、ナツヤは指輪を手に握らせる
「安心しろ…俺が、お前の希望だ」
「マネージャーが……僕の希望……」
「そうだ、お前のことも、お前のファンも守る…だからお前は歌うんだ」
ナツヤの言葉に安堵したのか、恐怖が和らぐ
「マネージャー……ありがとう…」
「礼はいい」
そう言うとナツヤは怪物の前に立つ
「悪いが5．b．pとの約束なんでな、ライブを壊させる訳にはいかない」
ベルトの横からカードを取り出す
「変身」
『カメンライド、ウィザード』
『フレイム、プリーズ』
希望を力に変える魔法使い『仮面ライダーウィザード』に変身する
「さぁ、ショータイムだ」
ライブは熱狂した、5．b．pの歌声とナツヤのアクロバティックな戦いが、ファンを熱狂させているのだ
「グルオオオオ！」
「さぁ、フィナーレだ」
『ファイナルアタックライド、ウィウィウィウィウィザード』
『チョーイイネ、キックストライクサイコー！』
5．b．pの歌の終了とともに、怪物も退けた

観客からはたくさんの拍手が湧き上がる
「ありがとう！皆ありがとう！」
リーンボックスの歌姫と、希望の魔法使いのコラボライブが今幕を閉じた
「マネージャー！」
5．b．pは去ろうとするナツヤを呼び止める
「もう俺はマネージャーじゃない」
「あ、そっか…なんて呼べば…」
「ナツヤでいい」
「分かった、改めて…ナツヤ！今日はありがとうございました！」
深く頭を下げる
「礼はいいって言ってるだろ？」
そんな言葉に5．b．pは首を横に振る
「僕や観客の皆を守ってくれたんだよ？お礼の1つや2つ言いたいよ」
そんなナツヤと5．b．pのやり取りの中、リーンボックスの守護女神『ベール』が来た
「あ！ベール様！」
「ナツヤさん、お話はネプテューヌたちから聞いていますわ」
「俺の話を？」
「はい、各国へ訪れて女神たちを救ってくれると」
「…」
「私からもお礼を言わせてください、5．b．pちゃんがここまで積極的になれたのも、貴方様のお陰なのですね」
「俺は何も…」
「ナツヤが言ってくれたんです、俺がお前の希望だって、その言葉を聞いたら心が落ち着いて……だから僕頑張れたんです」
「そうだったんですの…本当にありがとうございますわ」
「……俺はただ」
「任務でやっている……そう言ってお礼の言葉を貰わずにいることも、ネプテューヌたちから聞いていますわ」

「……」
「何が貴方様をそうさせるのですか？」
「……俺はただ……俺は……」
「…分かりましたわ、今は深くは聞きません…ですが、いつか答えを聞かせてくださいまし」
「……ああ」
ナツヤはその場を去る
「……俺に…礼はいらない……」
そしてこの後、ナツヤの生き方を大きく覆す出来事が起こるのであった…

破壊者の正体【1】

ナツヤはこの世界に来てからというものの、自身の感情が表に出ることが多くなったことを考えていた
「…昔はこうではなかったのに……」
この世界の何かが彼を変えたのだ、それは彼自身にも分かっていない
「……考えるだけ無駄か」
彼はすぐさま思考を切り替えて日課の特訓を行っていた
時は同じくプラネテューヌでは、四女神と女神候補生らが揃っていた
「本日お集まりいただいたのは他でもありません、今朝、皆様宛にこのような手紙が届いたのです」
そう言うとイストワールは一通の手紙を指さす
手紙に書かれていたのは日時指定と場所を指定されたものだった
「……罠ね」
ノワールが手紙を見るなりそう呟く
「恐らく私たち四女神を誘き出すもの…」
「ですが一体誰がこんなことを？」
「差出人は不明です、ですがノワールさんの言う通り罠の可能性が大きいです」
「でもさ、行ってみないと罠か分からないよね」
「確かにネプテューヌさんの言う通りなのですが……」
「大丈夫だよ！私たち強いし、それに絶対ナッちゃんも来てくれるよ！」
「ナッちゃん…？」
「ああそっか、いーすんにはまだ話してなかったけど、私たち神崎ナツヤって人に助けられたりしたんだよ」
「神崎ナツヤ……」
イストワールはなにか引っかかるのか、考え込む
「それで、どうするの？罠かもしれないけど行くの？」

「私は行く気満々だよ！皆は？」
「まぁ…ネプテューヌ1人だけってのもダメだし…しょうがないわね、私も行くわ」
「それじゃあ私も行くわ」
「それでは私も」
「あ、お姉ちゃん…私も…」
「ユニはここで待ってて」
「え…」
「大丈夫よ、すぐ帰ってくるから」
「ロムとラムも、ここで大人しく待っててちょうだい」
「うん！」
「早く帰ってきてね…」
「ええ」
「よーし！じゃあ行こー！」
ネプテューヌたちは女神化してギョウ界墓場に向かって飛ぶ
「皆さん…どうかご無事で……」
ナツヤは疑問に思っていた、いつもなら来るはずのネプテューヌが来ないのだ
「……静かでいいけどな…」
途端、彼は嫌な予感がし、プラネテューヌに向かう
プラネテューヌではユニら女神候補生が姉の帰りを待っていた、ネプギアはアイエフと一緒にネプテューヌらの後を追っている
「……」
姉のことが心配なのか、少し空気が重い
「…あー、入ってよかったか？」
「あ…ナツヤお兄ちゃん…」
「空気が重いが…どうしたんだ」
「実はね…」
ラムが説明しようとした時、アイエフとネプギアが戻ってきた
「……」
「……」

だが2人の空気も重かった
「ネプギア…？」
「……ナツヤさん…」
「ネプギア……どうしたの？」
「……お姉ちゃんたちが……」
ネプギアの口から告げられた言葉は、姉の帰りを待つ3人に深く突き刺さった
「お姉ちゃんたちが負けた…？」
「そ、そんな…」
「お姉ちゃん……（うるうる）」
「……」
「…なんで……なんでなの！」
ユニの瞳は涙をためている
「ネプギア！あなたついて行ったのよね…何も出来なかったっていうの！」
「ユニちゃん…」
「…それにアンタもよ」
ユニの視線はナツヤの方にむく
「……俺…？」
「アンタがお姉ちゃんたちについて行けばお姉ちゃんたちは負けなかった！捕まったりしなかった！」
「……」
「どうして行かなかったの…？どうしてお姉ちゃんたちを助けてくれなかったの？」
「…任務になかったから……」
「…任務…任務任務任務！あなたは任務じゃないと動けない無能なの!?」
「っ…」
「お姉ちゃんじゃなくてアンタが捕まればよかったのよ！」
ユニは泣きながら部屋を出る
「ユニちゃん……」

「……」
　ナツヤは外の空気を吸うため外に出ていた
「……」
「あ、ナツヤさん…」
「ネプギア…」
「……あの……ごめんなさい…」
「ネプギアが謝ることじゃ…」
「……ユニちゃんがああ言った時…私もそう思っちゃったんです……もしナツヤさんが居れば……もしナツヤさんが……お姉ちゃんの代わりに捕まっていれば……」
「……俺は……俺は愚かだな……無能って言われても仕方ないな…」
「無能だなんて……」
「……」
「……ナツヤさん、私に稽古をつけてくれたことがありましたよね？」
「…ああ」
「あれは任務にありましたか？任務で私に稽古をつけてくれましたか？」
「……いや……違う…」
「ですよね、その他にもお姉ちゃんたちを助けてくださったことや色んなことがあります……だからナツヤさんは任務じゃないと動けない無能ではありません」
「ネプギア……」
「……私はお姉ちゃんたちを助けたいです…ナツヤさんはどうなんですか？」
「……俺は……俺は…」
　ナツヤの脳裏にはネプテューヌらと過ごした日々が蘇った
「……俺は、ネプテューヌたちを助けたい」
「…ありがとうございます、ナツヤさん」
「ネプギア…ナツヤ…」
「あ、ユニちゃん…」
「……ごめんなさい……私、お姉ちゃんが捕まったって聞いて…気が

動転して……」
「いや、いいんだ……おかげで目が覚めたよ…」
「え…？」
「俺もネプテューヌたちを助ける、任務とか関係なくな」
「ナツヤさん…」
「そのために最低限やれるだけの事はやる、今から特訓だ」
「…そうですね……助けに行っても私たちの力が適わなければ助けれない……そういうことですね」
「そうだ」
「分かりました……よろしくお願いします！」
　ネプテューヌらを助けるため、ナツヤとネプギアたちは特訓を開始した
「……なるほど、つまりナツヤさんはこの世界にとって必要な存在なのですね」
「そうだ、この世界に必要であると同時に、この世界があいつの居場所だ」
「…わかりました、では神崎ナツヤさんの戸籍を用意致します」
「頼んだぞ、イストワール」
「はい、門矢士さん」
「改めて、私はプラネテューヌの諜報部員のアイエフよ、どうぞよろしく」
「ねぷねぷとあいちゃんの友達のコンパですぅ～」
「神崎ナツヤだ、よろしく」
「ありがとね、ネプギアたちを元気付けてくれた事と、ネプ子たちを助けるのを手伝ってくれる事」
「礼はいい……俺はただ、助けたいと思ったから助けに行く」
「見かけは無愛想なのに、案外いい人なのね」
「お待たせしました、行きましょう！」
　ネプギアたちが準備を終え、ネプテューヌたちの元へ向かう
「ホントに来るんちゅか？その世界の破壊者ってやつ」
「……」

「おばちゃん？聞いてるっちゅか？遂に耳もおばちゃんになっちゃったちゅか？」
「ええいうるさいね！考え込んでただけだよ」
「考え事っちゅか？」
「……あの協力者をどこまで信用していいのやらね……確かに奴から貰った怪人の力で女神を遥かに上回る力を貰った……けれど、私にはあいつはまだ何か隠してると思ってね……」
「気のせいだと思うっちゅよ」
「ふん、そうだといいのだけどね……っと、話してたら来たようだね…女神候補生と世界の破壊者」
「いいか、数が多すぎるからあまり無理はするなよ」
「はい！」
湧いて出てくるモンスターに対してネプギアたちは武器を手に取る
倒しても倒してもキリがない、まるで無限を相手にしているかのような気分になる
「数が多すぎる…！」
「きゃっ！」
「ロムちゃん！」
「ダメ……このままじゃ……」
（こんな時……お姉ちゃんなら……お姉ちゃんならどうする…）
その時、ネプギアは無意識に姉に頼っていることを自覚した
（私……どうしてお姉ちゃんを……私…無意識にお姉ちゃんを頼ってばかりだった…お姉ちゃんなら出来る…お姉ちゃんなら守ってくれると思い込んで弱い自分のままでいいと思っていた……でも、今はお姉ちゃんはいない……それなら、私が強くなきゃ！）
瞬間、ネプギアを光が包み込む
（ナツヤさんも言っていた……私なりの強さ……やっと分かりました）
自分の姉に頼りきりな思いを振り払ったネプギアは、『パープルシスター』へと変身を遂げた

破壊者の正体【2】

「私が先行して道を作ります！」
　そう言うとパープルシスターは目の前の敵を斬り倒していく
「ネプギアに続くぞ！」
　ナツヤたちはパープルシスターが斬り倒したところから敵の包囲網を抜け出す
「抜け出したっちゅよ」
「ふん、そのくらいじゃなきゃつまらないからね」
「……随分余裕そうっちゅね」
「当たり前だろ？四女神に勝った私が女神候補生らに恐れるもんか」
　四女神を打ち負かしたからか、絶対に自分が勝つと思っているマジェコンヌ
「そう上手くいくっちゅかね」
　ワレチューはトリックザハードを倒した神崎ナツヤを警戒しているようだった
「ここか…」
　ナツヤたちはネプテューヌたちが捕まっている場所まで辿り着く
「お姉ちゃん！」
　パープルシスターが行こうとするが、マジェコンヌが立ちはだかる
「ここまで来れたことは褒めてあげるけど、あんたじゃ私の相手にならないよ」
「やってみないと……分かりません！」
　パープルシスターは武器を構え、マジェコンヌに接近する
「遅いね！」
　しかし軽やかに躱すとそのままパープルシスターを蹴り飛ばす
「くっ！」
　しかしすぐ体制を立て直し、後ろに飛び退く
「強い……」
「まだまだこんなもんじゃ無いんだろ？本気できな！」
「……力の差は歴然か…」

目の前の戦いをみてそう呟くナツヤ
「行こ！ラムちゃん！」
「うん！ネプギアちゃんを助ける！」
ラムとロムがパープルシスターを手助けしに行く
「ネプギアちゃん！」
「私達も戦う！」
ロムとラムは得意の魔法でマジェコンヌに攻撃するが、効いている様子はない
「目障りだね！」
「ロムちゃん！ラムちゃん！」
ロムとラムに標的を変えたマジェコンヌの前に行き、ロムとラムを守る
「まとめて吹っ飛びな！」
「きゃぁ！」
「ネプギアちゃん！」
パープルシスターを助けに行ったのに助けられてばかり、ロムとラムは姉のブランや友達を助けたいと強く願った……その願いが通じたのか、２人を光が包み込む
「なにっ!?」
マジェコンヌは突然の光に驚きを隠せない
「これが…」
「大切な人を守る力…」
２人は『ホワイトシスター／ラム』と『ホワイトシスター／ロム』に変身を遂げた
「ネプギアちゃんやお姉ちゃんを！」
「これ以上傷つけないで！」
格段に力を増した魔法でマジェコンヌを攻撃
「ぐっ！」
これにはマジェコンヌも防御するので精一杯のようだ
「……ロムとラムも変身出来た……なのに…なのにどうして私だけ変身出来ないの…」

マジェコンヌに銃を構えつつ、自分だけ変身出来ないことに苛立ちと焦りを感じるユニ
「こんな所……お姉ちゃんに見られたら……お姉ちゃんになんて言われるか……」
ここでふと、自分が無意識に姉のノワールのことを考えてることを自覚した
「そうよ……今はお姉ちゃんは関係ない……ただ目の前の敵を撃ち抜くことだけを考えるのよ…」
雑念を全て振り払い、マジェコンヌに狙いを定め……撃つ
「ぐっ！」
「やった……って、私……変身してる…」
全ての雑念を振り払ったユニは、己の力で『ブラックシスター』へと女神化していたのだ
「よかった！ユニちゃん！」
ネプギアもユニが無事変身出来たことを喜ぶ
「ふ……ふん！これくらい出来て当然よ！」
姉に似てツンデレなので素直に喜べないユニ
「おのれぇ……たかだか女神候補生ごときが！」
マジェコンヌは怪人の力を最大限に引き出す
「グォォオオオオ!!」
「あれはまさか……」
ナツヤはマジェコンヌが怪人の力を使っているところを見て急いでパープルシスターたちの元へ向かう
「な、何あれ……」
「怖い…（がくぶる）」
「グッフッフッフ…コノ力サエアレバ私ガ負ケルコトナドナイ！」
「っ！」
ホワイトシスター／ロムとホワイトシスター／ラムはマジェコンヌの変化に驚愕し、パープルシスターは恐怖から武器を構えて防御の姿勢をとる
「ガァァァア！」

マジェコンヌの一撃でパープルシスターたちは吹っ飛んでしまう
「きゃぁああ！」
「ネプギア！」
ブラックシスターはパープルシスターたちの元へ駆け寄る
「なんて強さなの……」
「結局は無駄ナノダヨ……女神候補生ゴトキガ私にカナウワケガナインダヨ！」
マジェコンヌは嗤う……しかしそれを許さない男がいた
「…嗤うな……」
「ナツヤ…さん…」
「ナニぃ？聞こえナイナァ」
「嗤うなと言ったんだ！」
「ナツヤ…」
「ネプギアたちは大切な人を守りたい思いが強かったから女神化出来た……それを、借り物の力で強くなったつもりでいるお前に！嗤う権利はない！」
「ナツヤお兄ちゃん…」
「お兄ちゃん……（うるうる）」
「チッ！お説教かい……アンタナニモンダイ！」
（……この世界に来た時……俺は自分が何をすべきか分からなかった…だから任務だと言ってお礼も何もかも避けてきた……けれど今は違う……ネプテューヌたちを…この世界を守る……この世界で俺は生きる…！）
「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ！」
ベルトの横からカードを取り出す
「変身！」
『カメンライド、ディケイド』
ナツヤは、かつて世界の破壊者として9つの世界を旅したマゼンタの戦士に変身した
「通リスガリノ仮面ライダーダトぉ？舐メルナぁ！」
マジェコンヌはナツヤに殴り掛かる

「ナツヤさん！」
　しかしナツヤは避けることなく、片手で受け止める
「ナニっ！」
「……」
　そしてそのまま蹴り飛ばす
「グッ!!」
「……行くぞ、みんな」
「え…？」
「俺だけの力じゃない……俺たちみんなの力でネプテューヌたちを助けるんだ」
「……はい！」
　パープルシスターたちは再び立ち上がる
「馬鹿な……貴様らドウシテマダ立ち上がレル！」
「当たり前だ！ネプギアたちはネプテューヌたちを助けたいから、大切な人を心から助けたいと思っているから立ち上がれるんだ！」
「フザケルナ！フザケルナ！フザケルナァァァァァァ！」
「ナツヤさん！」
「ああ、行くぞ！」
　ナツヤがマジェコンヌの攻撃を弾き、その隙をパープルシスターが剣で斬り、ブラックシスターが狙い撃ち、ホワイトシスター／ロムとホワイトシスター／ラムが魔法で攻撃する
「グァァァァ！」
「トドメだ、行くぞみんな」
「はい！」
『ファイナルアタックライド、ディディディディケイド』
「グッ！」
　ナツヤは武器のライドブッカーガンモードで必殺のエネルギー弾を打ち込み、マジェコンヌの防御を弾き、その隙をすかさずホワイトシスター／ロムとホワイトシスター／ラムが魔法で動きを止めさせ、ブラックシスターがゼロ距離射撃をし、パープルシスターが剣で斬り抜ける

「バカナ！私ガ負けるダト!?馬鹿な！バカナァァァァァァァァァ！」
　無事マジェコンヌを倒し、あとはネプテューヌたちを助けるだけなのだが……突如として、ネプテューヌたちを閉じ込めていた場所が大きく爆発する
「なっ……！」
「そんな……」
「あ……いや……」
「お姉ちゃん…」
「うっ…ううっ」
「お姉ちゃん……お姉ちゃーーん！」
　誰もがネプテューヌたちは爆発に巻き込まれたと思っていた……だが、空から声がした
「ネプギア！」
　空を見上げると、女神化して脱出していたパープルハートたちの姿があった
「お姉ちゃん……お姉ちゃん！」
　パープルシスターは泣きながら飛び、姉に抱きつく
「ネプギア…ありがとう、よく助けに来てくれたわ」
「良かったよお姉ちゃ～ん！」
「ユニ、よくやったわね自慢の妹よ」
「お姉ちゃん…無事でよかった…」
「お姉ちゃん！」
「良かった…（うるうる）」
「心配かけたなロム、ラム」
「ベールさんも、助かって良かったです」
「ふふっ、お気遣いありがとうございますわ」
「……良かったなみんな…」
　パープルハートたちはナツヤに気づくとナツヤの方に降りてくる
「ナツヤ……必ず来てくれると信じていたわ」
「1度だけじゃなく2度も助けられるなんてね」
「いや、俺は何もしていない……ネプギアたちがお前たちを助けたい

と強く願ったからこそ…」
「確かにそれもあるけれど……貴方がいたお陰でもあるのよ」
「はい、ナツヤさんがあの時言ってくれた言葉……あれがなければ私は膝をついていました…ありがとうございます！」
「ネプギア……」
「だから、自分がやったことに誇りを持って…胸を張ってちょうだい」
「……そうだな……」
　ナツヤは今回の事件で、感情と生きる場所を見つけた
「……俺はこの世界で生きようと思う」
「ホント？嬉しいわ」
「…改めてよろしく、みんな」
　みんなは快くナツヤを迎え入れたのであった……
「マジェコンヌは負けたか……まぁいい、貴様がこの世界で生きるならばチャンスはいくらでもある……今はせいぜい仮染めの平和に生きるがいい…本当の地獄はこれからだ……フッハッハッハッハ！」
　神崎ナツヤの物語は……まだ始まったばかりであった…
「ここがディケイドのいる場所か……いいお宝が眠ってるといいんだがな……」
「あ～、美味しそうな食べ物～」
「あ、おい待てよ！……ったく……」
　謎の男の手には、シアンの銃が握られていたのだった

ドS女神とトレジャーハンター

マジェコンヌとの戦いを終えたナツヤは今、プラネテューヌの教会にいた
「むぅ～」
「いつも言ってるが、拗ねても書類は片付かないと思うんだけど」
「ネプテューヌさんは仕事するのが嫌なだけなんです…」
プラネテューヌに来てからというもの、ネプテューヌは何かと理由をつけて仕事をしていなかった
「だってだって、大抵の事はネプギアとナッちゃんがやってくれるもん」
「やらないからな」
「ナツヤさん、ネプテューヌさんを甘やかさなくても大丈夫ですよ」
「ねぷ!?いーすんなんてことを言うの！」
「事実です！」
「……ネプギアも大変だな」
「あ、あはは…」
苦笑いしか出来ないネプギアだった
「何してるのよ」
「あ！あいちゃん聞いてよ！いーすんったら仕事仕事って！」
「それはネプ子が仕事しないからでしょ……そんなことより、ナツヤにお客よ」
「俺に？」
ナツヤはプラネテューヌに住みながらあらゆる問題を解決する何でも屋（ネプテューヌ案）をやっていた、今日も問題を抱えた人が来たのかと思いながら依頼人の元へ向かう
「あ、すみませんすみません、お忙しかったですかねぇ」
「いえいえ……ええっと…」
「あ、おれさ……私は『カミナツ』と申します」
「カミナツさんですね……私は神崎ナツヤと申します…それでご要件の方は」

「実は……人探しをしていてね」
「人探し……」
「ああ、背は小さくてちんまりしたちんちくりんの女なんだけど、クマのぬいぐるみ持ってるから分かりやすいはずなのに見つかんないんだなぁこれが」
　依頼人である男はイキナリ饒舌になり喋り出す
「え、あ、はい…」
「んで何でも屋があるからここしかねぇと思って訪ねたわけですわ」
「そ、そうですか……（めちゃくちゃ馴れ馴れしいな…）」
「何でも屋なら人探しもやってるんですよね？」
「え、はい…」
「じゃあ決まりだ！お願いしますよ！」
「は、はい…」
　こうして半ば強制的に人探しを始めるナツヤであった
「最後にその人といたのがこの商店街ですか」
「ああ、ここで待ってろって言ったのに言う事聞かずにどっか行ったんだ」
「なるほど…」
「……でも案外モンスターが多いところにいるかも…」
「…それはどうして？」
「戦うのが好きっていうか……戦闘狂って言えばいいのか…」
「それならモンスターが出現しやすい場所を中心に探索しましょう」
　ナツヤとカミナツは森へと進んでいく
「だいぶ歩いたが…それらしき人は見当たりませんね」
「んー、ここに居なかったら居ねぇか…」
　その時、微かに戦闘音が聞こえる
「あっちに誰かいますね」
「あー、じゃあ連れかもしれない」
　2人は音のする方向へと進んでいく
「だいぶ歩いたのに何も居ねぇな…」
「……いや、誰かいる…」

そこには蛇腹剣を持った女性がエンシェントドラゴンをいたぶっていた
「アハハ！たっくさん痛ぶってあげるわ！」
「あれがお前の連れか」
「そうみたいだなぁ…」
ピクリとも動かなくなったエンシェントドラゴンを見ると、ナツヤたちの方を見る
「あらぁ、勝手に居なくなるからどこに行ったか心配したじゃなぁい」
「馬鹿言えお前が勝手にはぐれたんだろがい」
「……っ、連れが見つかってよかったな、じゃあ」
去ろうとするナツヤをアイリスハート（以降ＡＨ）が呼び止める
「あら、貴方が神崎ナツヤでしょ？」
「…なぜ俺の名前を」
警戒しながらＡＨの方を見る
「うふふ、私とカミナツは貴方を見つけることが目的なのよ」
「…なに？」
イマイチ言っている意味を理解出来ていないナツヤ
「別次元に俺と同じ奴がいるって士に言われたからな」
「士さんに…？」
「それで興味が湧いてな、お前を探して実力を試したいんだ」
カミナツはシアンの銃、ディエンドライバーを手にもつ
「っ！それは…！」
「そういや言ってなかったな…改めて自己紹介だ、俺の名はカミナツ様……そして」
『カメンライド』
「通りすがりのトレジャーハンターだ」
『ディエンド』
カミナツはシアンの戦士、『仮面ライダーディエンド』に変身した
「てめぇの実力、確かめさせて貰うぜぇ！」
『アタックライド、ブラスト』
ナツヤに対して撃ちまくる

「っ！」
『カメンライド、ディケイド』
　咄嗟にディケイドに変身し、防御する
「ヒュー、反射神経はいいな…だがこれならどうだ！」
　カミナツは2枚のカードをディエンドライバーに入れる
『カメンライド、ガタック　　ザビー』
　青いクワガタの戦士『仮面ライダーガタック』と黄色のハチの戦士『仮面ライダーザビー』を呼び出す
「4対1だぞ…」
「卑怯とは言わせねぇぜ？それにこれくらい余裕なんだろ？」
「……まぁな」
『カメンライド、カブト』
　ナツヤも赤いカブトの戦士『仮面ライダーカブト』に変身し、カミナツたちを相手する
「ふっ！はっ！」
　呼び出したガタックとザビーは言わばコピー戦士なので脅威ではないが、カミナツとAHは自在に攻撃してくるのでナツヤも苦戦している
「そらそらそら！」
　AHは蛇腹剣でナツヤに対して攻撃している
「ぐっ！」
　ナツヤは避けることに集中し、反撃のチャンスを伺っている
「ここ！」
「あめぇな！」
　AHの隙を読んだナツヤの攻撃は、カミナツの銃弾によって防がれる
「ぐっ……（こいつら、コンビネーションが優れている…何をしても攻撃が通らない…）」
「へっ、大したことねぇなぁ」
　カミナツはつまらなさそうに呟く
「……まだ…まだ！」

ナツヤはライドブッカー（ソードモード）を構え、突っ走る
「突っ込んで来るだけじゃつまらないわね！」
ＡＨは蛇腹剣でナツヤを斬りつけるが、ナツヤは止まらない
「ぐっ！ウォオオオ！」
「なっ！」
気迫に押された隙を見逃さず、蛇腹剣を掴む
「捕まえ…た！」
そのままライドブッカーで斬りつける
「ぐぁ！」
「こいつ！」
カミナツは狙いを定めるが、既にナツヤは間近に迫っていた
「終わり…だ！」
『アタックライド、スラッシュ』
斬れ味を増したライドブッカーで連続で斬りつける
「ぐはぁ!!」
倒れ込み、変身が解除される
「はぁ…はぁ…」
ナツヤも膝を着き、変身が解除される
「……ははっ、強ぇ…甘く見てたのは俺様の方だったぜ…」
カミナツはそう呟くと、上半身を上げる
「へっ、悪かったなナツヤ、大したことねぇとか言ってよ」
「…安心しろ、気にしていない」
ナツヤはカミナツに手を伸ばす
「立てるか？」
「おっ、悪ぃな…」
その手を強く握りしめ、立ち上がる
「いててて、効いたぜさっきの」
腹の当たりを擦るカミナツ
「こっちとしては渾身の攻撃だったからな……効いて貰わなければ困る…」
倒れ込んでるＡＨの方へ足を進める

「大丈夫か？」
「……しい」
「…？なんだって？」
「…悔しい、悔しい悔しい！」
とても悔しがっているＡＨ
「あと一歩だったのに…悔しいわね…」
「だが、お前も強かった」
手を伸ばす
「ふっ、慰めは要らないわよ」
手を掴み、立ち上がる
「さて…ちと体は痛いが、目的も済んだし元の次元に戻るか」
カミナツは灰色のオーロラを出し、戻ろうとする
「あ、そうだナツヤ！」
戻ろうとしたカミナツはナツヤを呼び止めてナツヤの元へ歩く
「なんだ？」
「ほら」
カミナツは手を出す
「……？」
「握手だ、これからは仲間としてお互い助け合おうや」
「…ああ」
カミナツとナツヤは握手を交わし、お互いを仲間だと認め合う
「ずるい～！私もする～！」
ぱたぱたと変身を解除していたプルルートが走ってくる
「ああ」
プルルートとも握手を交わし、仲間だと認め合う
「じゃあな！」
カミナツとプルルートは元の次元に戻る
「……大変な1日だったな…」
ナツヤもまた、帰る場所へと帰って行った……
「……本当に神崎ナツヤの血で彼女は目を覚ますのか」

「ああ、約束しよう」
目つきの悪い少年が純白のスーツと黒ネクタイの青年と話している
「もう少しだ……だからそれまで待っててくれ……ベール」

バッドエンド【1】

仕事が嫌なネプテューヌはバーチャフォレストに散歩しに来ていた
「あーやだなぁー、どうして仕事なんてものがあるんだろー、私が仕事しなくても明日は来るし代わりはいるしー」
そこら辺に落ちてたひのきのぼうを振り回しながら進んでいると、いつもとは違う場所にたどり着く
「ねぷ?こんなところあったっけ…?」
目の前には灰色のオーロラがあり、辺りの森はそれを囲むように無くなっていた
「…気になるし覗いて見よっかなー」
ネプテューヌが灰色のオーロラの向こう側を覗くと、そこには荒野と化したバーチャフォレストがあった
「ねぷ!?なにこれー!」
不気味に思ったネプテューヌはその場を離れ、プラネタワーへと帰っていく
「ってことがあったの!」
「いきなり出ていって帰ってきたと思えば…」
「ホントだよ!ホントのホント!」
ネプテューヌはナツヤに先程見た出来事を話していた
「…だが確かに妙だな……調べてみる必要はありそうだ」
「だよね!ナッちゃんならそう言うと思ってたよ!」
ネプテューヌは立ち上がり、先程の場所へと案内しようとするが
「いや、俺一人でいい」
ナツヤはそれを断る
「どうして?」
「ネプテューヌたちに何かあったら大変だからな」
「やっぱナッちゃんは優しいねー」
そしてナツヤはバーチャフォレストへと向かっていった……
「ここがネプテューヌの言っていた…」

目の前には灰色のオーロラがまだあった
「……よし」
ナツヤは灰色のオーロラをくぐる
「…確かにこれはひどいな…」
荒野と化したバーチャフォレストをみてそう呟く
「とにかく、何があったのか調べないとな…」
「そうそう!この世界の私たちが何やってるのかも知りたいしね!」
聞き覚えのある声がして振り返ると、ネプテューヌたちが同じく灰色のオーロラをくぐってついて来ていた
「ネプテューヌ…俺一人でいいと言っただろ」
「でもナッちゃんが心配だしー」
「貴方に何かあるんじゃないかってヒヤヒヤするのよ」
「あなたって無茶する時があるから…」
「ですから、ついて行った方が貴方様を見守れると思いまして」
各々ナツヤの事が心配でついて来ていたのだった
「心配してくれるのはありがたいが……お前たちに何かあったら…」
「ナッちゃんが守ってくれるから大丈夫だよ!」
「自分の身は自分で守るのよネプテューヌ」
ナツヤ任せなネプテューヌにツッコミを入れるノワール
「……あまり無茶はしないでくれよな」
「お互い様よ」
「ああ、俺も無茶しないようにするよ」
「それじゃあ、行くよ!」デンデンデデデン?カーン／
こうして四女神とナツヤの探検が始まる
「……おかしい…」
ナツヤは何か異変に気づく
「どうしたの?」
「歩いても荒野や廃墟だし人の気配もない……」
「確かにそうだよね、オマケにモンスターもいないし…」
そう、ここまでナツヤたちは人やモンスターに1度も会っていないのだった

「一体この世界で何が起きたと言うんだ……」
「……ねぇナツヤ…少し違和感を感じない？」
ふと、ノワールがナツヤに問いかける
「違和感…？」
「始めてきた感覚じゃないのよ……こんなに荒れ果てた場所は見たことないはずなのに……」
「ノワールも？実は私もだよ」
どうやらネプテューヌもノワールと同じ感覚のようだ
「……まさか…」
ナツヤは考え込むと1つの結論に辿り着いてしまう
「…ここはゲイムギョウ界なのか…？」
ナツヤの一言に4人は固まる
「そ、そんなの有り得るわけ…」
「でも、ノワールとネプテューヌが同じ感覚になるということは…」
「そうだとしても信じたくないよー！」
ノワールとネプテューヌは荒れ果てた場所がゲイムギョウ界であると受け止めきれない様子
「だとしたら…この世界の私たちはどうなったのかしら…」
ブランが疑問を口にした
「確かにそうですわね……この世界にも私たちがいるのなら、こんなにも変わり果てた大地になるはず…」
「……何者かの手によって…女神たちが倒された……そう考える方が自然なのかもな…」
「だとしても一体誰が……」
5人が話し合っていると、足音が聞こえてくる
「っ！…誰かいるのか？」
荒れ果てた場所に人がいることに驚くも冷静を保ち声をかける
「……」
そこには目つきの悪い少年がいた
「人…か……ちょうど良かった、この世界で何が起きたのか…」
説明してくれ、と言葉を続けようとしたナツヤの言葉をさえぎり、

少年は口を開く
「待っていたぞ神崎ナツヤ」
ナツヤは自身の名前を呼ばれたことに驚く
「な、なぜ俺の名前を…」
「ある男の頼みでな…ここでお前を殺す」
少年の腰には黒くなったディケイドライバーが巻かれていた
「そ、それはディケイドライバー！なぜお前が！」
「なぜ…？それは俺も仮面ライダーだからだ……変身」
『カメンライド、ディケイド』
禍々しい闇が少年を包み、闇が晴れるとそこには闇へと落ちたディケイド『仮面ライダーダークディケイド』が立っていた
「な、ナツちゃんと同じ!?」
「でも……黒いし……それに禍々しい…」
「さぁ、お前も変身しろよ、殺される前に楽しもうぜ」
「俺はお前と戦う理由は……」
「お前が無くとも俺はあるんだよ！」
少年はナツヤに斬り掛かる
「危ない！」
ネプテューヌが女神化し、剣で受け止める
「ちっ、邪魔だっ！」
受け止められた剣を手放し、回し蹴りを繰り出す
「なっ!?きゃ！」
咄嗟のことで対処出来ずまともに食らってしまう
「ネプテューヌ！」
ナツヤがＰＨの元へ駆け寄ろうとするが、少年が間に入り止める
「そこを退いてくれ！俺はお前とは戦いたくない！」
「まだ分からねぇか……お前が戦う意思を見せなければ女神共から殺してもいいんだぜ？」
「なっ…!?」
彼の言葉には嘘偽りないことを感じ取ったナツヤは覚悟を決め変身する

「くっ……変身！」
『カメンライド、ディケイド』
「はっ、やっと戦う気になったか」
「……」
『『アタックライド、スラッシュ』』
お互いにスラッシュのカードを使い、剣の切れ味を上げぶつかり合う
「はぁっ！だぁ！」
「っ！」
少年は攻めを緩めず連続で攻撃するのに対し、ナツヤは守り主体の戦いを余儀なくされる
「そらっ！守ってばっかじゃ！勝てねぇぞ！」
「ぐっ…！」
隙を見て攻撃し返そうにも、少年の戦い方は無造作に剣を振るうものであり、攻撃の隙が見つけにくい
「……！」
剣を弾き、カードを取り出す
『カメンライド、ドライブ』
『ドライブ！ターイプ、スピード！』
タイヤが特徴的な赤い戦士『仮面ライダードライブ』に変身し、素早く斬り抜ける
「素早さで翻弄し、そのまま無力化しようって魂胆か…いかにも甘いお前が考えることだな」
少年は次にナツヤが通る場所を予測し、そこに向かって蹴りを放つ
「なっ!?ぐあ！」
あまりにも突然なことに対応出来ず、まともに食らってしまう
「ナツヤ！」
ノワールも女神化し、ナツヤの元に向かおうとするが、ナツヤがそれを止める
「来るな…！」
「っ…来るなって言ったって……傷だらけの貴方を放っておけってい

うの!?」
「これは……俺とこいつの戦いだ……皆を巻き込む訳にはいかない……」
「俺は女神を相手にしても構わんぞ?」
少年がそう言った瞬間、ナツヤの声色が変わる
「ネプテューヌたちに手を出すんじゃねぇ!お前の相手は俺だけだろうが!」
少年はナツヤの気迫に少し驚いた様子、ネプテューヌたちは初めてナツヤが出す気迫に怖がっている
「お前の真の目的はなにか俺は知らない……だが!関係の無いやつを巻き込むな!俺の仲間に手を出すやつは誰だろうと許さん!」
ナツヤは再びライドブッカーを構え、少年と対峙する
「……やっぱ気に入らねぇなぁ…仲間だろうが弱い奴は淘汰されるのが当たり前だろうが」
「それは違う!弱くたってその心に強い信念があれば自ずと強くなっていくんだ!」
「その考え方が気に入らねぇんだよ!」
少年はナツヤに飛びかかり斬ろうとし、ナツヤはそれをライドブッカーで受け止める
「強い信念があれば強くなれるだと?夢物語も大概にしやがれ!そんなんで強くなったらこんなことにならなかったんだよ!」
「っ…こんな…こと……?」
一瞬動揺したナツヤの隙を突き、少年は斬り付ける
「ぐっ!」
「この世界がこんなことになったのも…何もかも失っちまったのも……あの力に頼った俺の弱さが原因だ……信念なんか関係ねぇんだよ!」
「お前は……この世界で何を…」
「……冥土の土産に教えといてやるよ、この世界で何が起こったのかをな」
少年がライドブッカーを地面に突き刺すと、ナツヤも同じようにラ

イドブッカーを地面に突き刺した
「この世界にも四女神と候補生はいた…だがもう居ない……なぜなら俺がこの手で……ゲハバーンで殺したからな…」